

## ソースタイン・ヴェブレンとシカゴ大學

— ヴェブレン評傳の一齣 —

小原敬士

〔はしがき。ソースタイン・ヴェブレンは一八五七年、ノールウェイ移民の子として Wisconsin 州の片田舎に生まれ、長じてはカールトン大學、ジョン・ホプキンス大學、イエール大學等に學んで、主として哲學を研究し、一八八四年、イエール大學から哲學博士の稱號を與えられた。その後、彼は一八九一年まではミネソタの農村に引きこもつて専ら讀書と執筆にたずさわり、一八九一年になつて漸くコーネル大學に働き口を得、更にその翌年、新設のシカゴ大學に移つたが、彼が經濟學や社會學に興味をもつようになり、それ等の問題領域において独自の思想を生み出したのは、一八九二年から一九〇六年に至るシカゴ大學時代のことであつた。こゝでは、専らこの時期におけるヴェブレンの學問的成長を、その社會的背景との關係において明かにすることを企てる。資料は主として Joseph Dorfman, Thorstein Veblen and His America, 1934. によつたが、面倒な引用はすべて省略した。なお紙數の制限のため、十分な敘述を行へなかつたが、いずれ近い機會にその不備を補いたいと思つてゐる。〕

ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857—1929) は一八九二年から一九〇六年までシカゴ大學の教職

にあつたが、彼が特異な社會學者、經濟學者としてアメリカの學界に彗星のように登場したのは、まさにこの期間におゐつたであつた。彼の處女作『有閑階級論』(The Theory of Leisure Class; An Economic Study in the Evolution of Institution, 1899)が世に出たのは一八九九年のことであつたし、第二の著作である『營利的企業論』(The Theory of Business Enterprise, 1904)が出版されたのは、それから五年後のことであつた。ヴェブレンにとつてはシカゴの十五年間はまことに稔多き年月であつた。彼はその間、旺盛な研究心と慧敏な感受性と、そしてまた鋭い批判力をもつて、彼が置かれた社會的環境と學問的雰圍氣の中から汲みとるべきものを汲みとり、批判すべきものを批判し、そして彼自身の獨自の思想を形成せしめたのである。

第十九世紀九〇年代のアメリカ社會は、その資本主義的發展に伴うさまざまな苦惱と動搖を経験しつゝあつた。その頃には、一方において鐵道・鐵鋼業・石油等の諸産業部門においてトラストの形態における資本の集積と集中が益發展するとともに、他方においては一八八四年の恐慌に引きつづく農民や労働者の貧困化が進行し、農民運動や労働組合運動が活潑に展開されていた。ハリスン政府の下における關稅法案については「關稅は國民を壓迫するがトラストはそのポケットを通り抜ける」という非難が加えられた。トラストに對してはヘンリー・ロイド(Henry Demarest Lloyd)が多くのパンフレットをかいてこれを攻撃した。市氏は生まれるとミルク・トラストの供給する牛乳を飲み、牛肉トラストの牛肉を食べ、石油トラストのお陰でその家に燈をつけ、死ぬと棺桶トラストによつて運び去られる——ロイドはそうかいている。このような國民の世論の反映として一八九〇年にはシャーマン・トラスト禁止法が制定された。しかし、労働運動はその後においてもなお高揚し、一八九二年にはカーネギー鐵鋼會社におけるホ

ームステッド争議が、一八九四年にはデブス (Eugene Debs) の指導によるブルマン會社争議やコックシイ (Coke) の煽動による失業者群のワシントン・デモ等が起つた。

當時の新興都市シカゴはそのような社會不安の坩堝であり、そのようなアメリカの苦惱の結節點であつた。それは「大きな田舎町にすぎず……主として木造の醜い、煤煙の多い、泥道の町」(Hamlin Garland)であつたが、後にシカゴ大學が建てられた湖畔の住宅街と南シカゴの労働者街とは特に際立つた對照を示していた。その南シカゴこそはヨーロッパ諸國からの移民の密住地であり、當時の凡ゆる急進的な社會運動の温床であつた。ヘンリー・ロイドの傳記をかいたカロ・ロイド (Caro Lloyd) の次のような敘述はその間の消息を如實に物語つてゐる。「シカゴの勤勞者達は、イギリスやアイルランド、ヨーロッパやオーストラリアの兄弟姉妹に友愛と同志の挨拶を送る。彼等はこゝやあそこの雇われない人々や土地や機械の問題の同一であることを認識している。すなわち、勞働解放の道は本質的には全世界同じだといふのである。」

シカゴ大學はまさにそのようなときに、また、まさにそのような處に、ジョン・D・ロックフェラーの贖金によつて建てられたのである(一八九二年)。ロックフェラーはいうまでもなくスタンダード石油會社の創設者であり、才腕と闘志に溢れた大資本家であつたけれども、同時に教會、病院、學校等の公共事業には惜みなく淨財を投出した。彼は「私の金をつくる力は神の賜物だと思ふ。それは力の及ぶかぎり人類の幸福のために伸長され行使さるべきものである。私は私のもつ賜物を恵まれているのであるから、益々金を儲け、かつその金を自分の良心の命ずるところに従つて同胞の幸福のために使うことは私の義務だと思ふ<sup>(3)</sup>」と言つてゐるのである。

シカゴ大學は豊富な資金と三十六歳の初代總長ウィリアム・ハーバー(William Rainey Harper)の手腕によつて、またたくうちに素晴らしい發展を遂げた。ハーバーは思想はむしろ保守的であつたが、「産業の將帥」のような手腕の持主であつて、シカゴに來るまでは、イエール大學のセム語教授、イエール神學校のヘブライ語教授、イエール専門學校の聖書文學教授、アメリカ・ヘブライ協會會長、アメリカ聖書文學會會長、チャウタウカ藝術大學校長等を兼ね、同時に二つの宗教雜誌の編集者でもあつた。彼はシカゴ大學の管理組織を確立したが、それは總長中心であつて、教授會は大なる権限をもたず、評議會(university senate)は各學部の部長だから成つていた。大學は、固有の大學學部、エクステンション(通信大學を含む)、出版部、圖書館、研究室、博物館、その他の附屬機關等の諸部門を含み、職員組織としては、deans, head professors, professors, associate professors, assistant professors, instructors, docents, tutors, readers, fellows, lecturers, assistants, 等の整然たる階級性をもつていた。そして研究發表機關として『政治經濟學雜誌』(The Journal of Political Economy)を始めとして實に十三の雜誌が創刊された。

ハーバーは教授スタッフに人材を集めることに特に熱心であつた。シカゴ大學は舊きシカゴ・バプティスト大學を母胎として建設されたものであり、アメリカにおける高等教育の神學的傳統に従つていたから、スタッフの中には宗教的色彩をもつ教授が多かつた。ハーバー自身、經濟學のラフリン(J. L. Laughlin)チェンバーレン(Thomas Chamberlain)、社會學のメモール(Albion Small)、歴史學のホルスト(Von Holst)、政治學のシヤムメン(Harry Pratt Judson)等がそれであつた。しかし、他方には獨創的な研究者や進歩的な思想の持主も決して少くなかつた。天文學

者マイケルソン (Albert Michelson)、生理學者ローブ (Jacques Loeb)、詩人ムーゼー (William V. Moody)、文學者トリングス (Oscar L. Triggs)、人類學者スタール (Frederick Starr)、哲學及び心理學のカルドウェル (William Caldwell)、哲學者デューイ (John Dewey) 等はいずれも従來の傳統的な學問に慊らない進歩的な學者達であつた。當時、行動心理學の主唱者として注目をひきつゝあつたパーズ (Charles S. Peirce) もシカゴ大學の關係者であつた。

當時コーネル大學の助手であつたヴェブレンは、一八九二年、シカゴ大學設立と同時に、經濟學部長となつたラフリン教授に伴つて、年俸五二〇ドルのフェロウとしてシカゴに赴任したのである。

- (1) ハンフリー・ロイドは當時における急進的な社會思想家であつて、Lords of Industry. 1881. Wealth Against Common-wealth, 1894 等、トラヌトの弊害を論じた多數の著書や、マンフレットをかゝるる。
- (2) Caro Lloyd, Henry Demarest Lloyd. 1847—1903. Vol. I. p. 163.
- (3) Mathew Josephson, The Robber Barons. The Great American Capitalists. 1861—1901. 1934. p. 325.

二

シカゴに赴任した最初の一年間にヴェブレンがやつた主な仕事は、トーマス・カーカップの『社會主義史』(Thomas Kirkup, History of Socialism.) をテクニストとして社會主義論を講じたこと、グスタフ・コーン (Gustav Cohn) の『財政學』を英譯したこと、經濟學部の機關雜誌『政治經濟學雜誌』の編集を擔當したこと等であつた。

中でも『政治經濟學雜誌』の編集については、ヴェブレは非常な熱意をもつて事に當り、自らもその年のうちに二つの論文と三つの書評をかいてゐる。論文というのは、六月號に載せられた「食料供給と小麦價格」と十二月號に掲げられた「一八六七年以後の小麦價格」であり、書評というのは、前記カーカブの書評（三月號）、オットー・ワルシヤウワー（Otto Warschauer）の『第十九世紀における社會主義と共產主義の歴史』、及びバーデン・ボウエル（B. H. Baden-Powell）の『英領印度の土地制度』に關するものであつた。マックス・ラーナーは九十年代におけるヴェブレの思想的發展を敘べて「九十年代の十年間においてはヴェブレの最初の收穫が擧げられた。この十年間に彼が學術雜誌にかいた論文は、彼の主要思想の大部分を含んでゐる。虚榮、工匠本能、産業的職業と金錢的職業、私有財産制の起源、婦人衣裳の經濟理論、形式主義の批判、傳統的經濟學の『豫備概念』の暴露、進化論的經濟學の提唱等がそれである<sup>(1)</sup>」と言つてゐるが、ヴェブレは日夜たゆまぬ讀書と思索によつて、着々と自己の思想的立場をきり開いて行つたのである。そして彼は間もなく「リーダー」の地位に進んだ。

一八九三年には新しい經濟恐慌が起つた。その年の二月二十日、四千萬ドルの資本金をもつフィラデルフィヤ・リディング鐵道會社は一億二千五百萬ドルの債務を生じて破産したが、これにつゞいて全國的な銀行や産業の倒産が始まつた。ノイエス教授の『アメリカ金融四十年史<sup>(2)</sup>』によると、一八九三年一年間の破産數は一八七三年のその三倍であり、その債務總額は十分に五割方多かつたといわれる。そして一八九三—九四年の冬には勞働者の失業と貧困化が激化し、そのことが新しい社會不安をひき起した。シカゴはいつでもそのような騷擾の震源地であつた。一八九四年の春には、オハイオ州マシロンに起つた失業者の徒黨——いわゆる「コモンウィール軍」——が、「コックシイ

將軍] ("General" Coxey) に率いられてワシントンに押しかけ、緑背紙幣の發行を要求する運動を行つたが、その運動の中心地もシカゴであつた。五月十一日にはやはりシカゴにおいてデブス (Eugene V. Debs) の指導によるブルマン客車會社の勞働爭議が発生し、軍隊が出動する騒ぎとなつた。

當時ヴェブレンは社會主義經濟學を講じていたが、その立場は相當に急進的であつたように思われる。彼はカー・カウツキー (Karl Kautsky) の『議會主義、國民立法及び社會主義』の書評『政治經濟學雜誌』一八九四年三月號) の結論において「このような變化若しくは成長が社會の保守的成員に與える最初の反省は、社會主義は私有財産制度に對する對立物という主要な特徴以外の他の凡ゆる題目において一層合理的となればなるほど、益々害惡に對するより有效な機關となるであろう、」と言つたし、「コモンウィールズの軍隊」についても、その「目的は政府通貨の創造を通じての資本の造出によつて實現さるべき信用創造により、多數のものに對する生計をつくり出すことである。すなわち、この『運動』の中心は明白な幻想であつた」といふながら、しかし、それは「アメリカの方法であり、新しい出發であつた」と書いたのである。しかし、そうは言つてもヴェブレンは單なる社會主義者となつたのではなくた。彼の興味はつねに、人類學や行動心理學を基礎として人間社會の歴史的發展を追求することに向けられていた。ヴェブレンは一八九四年十一月の『月刊通俗科學』に「婦人衣裳の經濟理論」という論文を發表したが、それは婦人の衣裳をもつて「衛示的消費」の一例と考え、その社會史的意義を明かにすることを目的としたものであつた。彼のいうところによると「婦人は元來、金錢的所有物であつたから、彼女の職能は價值ある財の衛示的不生産的消費によつて、その單位の金錢的實力を表示することである。」彼はいう。衣裳の最初の原理は「衛示的消費」で

ある。「衣裳は衣料ドレッシングのような有効性の意味において経済的であつてはならない」と。またヴェブレンは『政治經濟學雜誌』の一八九五年三月號で、その前年に出版されたカール・マルクスの『資本論』第三卷の紹介をやつてゐるが、その場合においてもヴェブレンの態度は十分に批判的であつた。「いまや、剩餘價值論と利率の日常的事實とをある程度調和せしめる必要が感ぜられたことは、マルクス主義的剩餘價值をそれと何等の關係なき問題に適用せしめようとする素朴かつ善意的な誤まつた適用に基くものと考えられる。剩餘價值理論はいかなる具體的事實とも極めて疎遠な感知できない位の關係をもつだけである。」ヴェブレンはそう言つてゐるのである。

その頃ヴェブレンはすでに「チューター」となつていたが、彼の講筵に列する學生の數は必ずしも多くなかつた。彼のゆつくりとした會話風の口調、その論文の一眼支離滅裂であること等が學生の人氣に投じなかつたのである。その上、彼は普通のクラス・ルームのやり方について全く無關心であつた。しかし、彼は少數ではあるが有能な學生をその周圍にひき付けていたようである。彼等はヴェブレンの自由主義思想とその博學に魅せられたのである。彼の門下の一人ミス・ハーディーのいうところによると、ヴェブレンはチョウサー、ジョージ・ボロウ、ウィリアム・モリス、セルヴァンテス等から最も多く引用を行つたという。また同じ門下のスチュアートによると「彼は研究の分野が何であれ、研究者が誰であつても、確信と忠實に探求された證明事項に裏づけられた果敢かつ新鮮な假説に對し、つねに眞に強き興味を懷いていた」という。彼の社會主義論をきいた學生達は「ポピュリズムやカール・マルクスについてと同じ位しばしば、ホピ・インディアン、『さむらい』、舊約聖書のヘブライ人、アンダマン島住民、北海の通商海賊等についてきいた」と言う。

ノースタイン・ヴェブレンとシカゴ大學

- (1) Max Learner, *The Portable Veblen*, 1948, p. 5.
- (2) Alexander Dana Noyes, *Forty Years of American Finance*, 1898, p. 182 ff.
- (3) Joseph Dorfman, *Thorstein Veblen and His America*, 1934, p. 119—120.

### 三

社會諸階級の矛盾と對立は思想と學問の相剋を伴わざるをえない。アメリカにおいては、第二十世紀の十年代以後には、いわゆる「社會改良主義の勝利」によつて、そのような矛盾と對立が漸次止揚されるのであるけれども、第十九世紀の最後の十年間においては、一方の側における急進的社會思想と他方の側における保守思想とが際立つた對立を示していた。それはアカデミーの世界においても例外ではなかつた。殊にシカゴ大學においては保守主義の傾向が益々有力となつたようにみえた。

丁度ブルマン争議があつた頃、シカゴ大學は創立者ジョン・D・ロックフェラーの肖像をうけとつたが、その除幕式に當つて同大學理事會長は言つた。「大産業を建設し經營するために自己の知性と精力を捧げるものは、有用にして價值ある市民である。彼の獲得する富は彼の有用性の徽章であり報酬である。」と。同じ頃、ウイスコンシン大學のイリー教授(Richard T. Ely)はブルマン罷業を擁護したという廉で非難を受けたが、シカゴのベミス教授(Bemis)も同争議における鐵道側の態度を批判したために大學を去らねばならなかつた。同大學の寄附者の一人であるチャウンシー・デビュー(Chauncey Depew)は、一八九五年に「その存在をロックフェラーの好意に負つてゐるこの施設

は、それ自身一人の天才によつて蓄積された富の適切な用途の記念碑である。コーネル、ヴァンダービルトその他、寛容で賞むべき愛國的な富豪の恩恵をうけてより舊き大學も同様である」と言つたし、ハーバー總長自身も同年の七月に次のように聲明した。「本學がその教授の意見の發表、若しくは自由市民としての義務の遂行の自由を何等かの仕方で制限したという論議は全然誤りであることを宣言する。」人はよりよき政治のために働かねばならない。しかし「大衆への懇えを科學的思想と間違えないように注意しなければならぬ。教授がこの混同を起した場合には、それは彼の去るべきときである。というのは、彼は彼が任命された目的を誤り、大學に仕えるためにはわれわれは科學的方法を用い、科學的仕事をなさねばならないことを忘れたからである」と。ラフリン教授も「ロックフェラーがシカゴ大學に三百萬ドルを寄附した機會に行つた公開講演の中で何人もロックフェラーが他人の富の蓄積を妨害するような仕方での巨富を蓄積したとはいうことができないと述べた。

これ等は直接間接大産業を支持する立場に立つものであつたけれども、しかし、社會學者や經濟學者の中には、トラストや産業獨占に對して批判的な立場に立つものも少くなかつた。ウォード (Lester F. Ward) は「フォラム」にかゝつた「Plutocracy and Paternalism」という論文の中でこう言つた。——自然法則はかつては物理的な力の形態をとつたが、今日ではそれは「實業界の敏捷」の中に具體化している。しかし、このような性向は、自由に機能することを許されるならば、結局において社會と競争自體を亡ぼさねばならないから、「近代盜奪」であるところの財閥政治は、物理的盜奪と同じように國家の強力な腕によつて抑制されねばならない。近代社會においては、自然法則は虛榮心に固有な活動を通じて物理的若しくは心理的な勢力を發展せしめる代りに、惠まれた階級の贅澤な怠惰によ

つて寄生的な墮落に向う。政府は弱者を保護することができず、獨占の存在が證明しているように、その凡ての精力を擧げて強者を保護する、と。ウォードはスモールとともに當代における代表的な社會學者であつたが、その年には、その外、トーマス (W. I. Thomas)、クランソン (Carlos Closson)、アミン (Friedrich Aminon)、ラフージ (G. d. Vacher Lapouge) 等の諸學者が社會學若しくは人類學についての多くの研究を發表した。トーマスは、『アメリカ社會學雜誌』一八九六年一月號に「民族心理學の範圍と方法」という論文を發表して、原始民族の社會制度、技術、アニミズム、宗教等の比較を行つたし、ラフージは「社會的進歩は主として住民の質に依存する。そして住民の質は、世代から世代に互る淘汰力によつて決定されるが、その淘汰力は自然的というよりもむしろ社會的なものである」と主張し、ヨーロッパの有力人種としての Homo Europeans と Homo Alpinus について詳細な研究を行つた。それ等の諸研究はいずれもヴェブレンの思想形成に大きな關係をもつたのである。

ハーバート・スペンサーが、『社會學原理』第三卷を出版することによつてその『綜合社會學』の體系を完成せしめたのも一八九六年のことであつた。スペンサーは「自由職業制度」(professional institution) と「産業制度」(industrial institution) という二つの範疇の下に、社會進化の過程を究明しようとしたのであるが、その場合の進化の過程は、隷從状態から始まり、軍事國家を経て絶對的自由契約の最後の段階、すなわち「産業制度」に到達するものと考へられた。自由職業制度というのは醫師、踊子、音楽家、俳優、教師、僧侶等によつて構成される社會状態であつて、そのような制度は隷屬状態若しくは軍事國家において發生する。しかるに産業制度というのは今日の經濟制度である。今日の全産業は相互依存的部分の全體である。貨幣は「裝飾」によつて他人を凌駕し、それによつてこれを服

従せしめようとする願望」に基いて軍事國家の中に發生したものであるが、今日においてはそれは交換の要具であり、それがなければ産業組織は不可能である。スペンサーはイギリスの勞働組合會議が「財産の總括的國有化」を承認したことを非難する。彼の見解によれば、近き將來には社會主義の可能性があるし、社會の律動的變化の可能性もあるが、最後には絶對的自由契約の状態が到達されることは不可避的であると考えられる。スペンサーのこのような思想はいずれかといえば保守的なものであつたが、ヴェブレンがそれから種々の影響を受けたことは疑いが無い。

恰かも同じ頃に『社會原力の理論』(S. N. Patten, *The Theory of Social Forces*, 1896)を著わしたパッチェンの思想はスペンサーのアメリカにおける亞種ともいふべきものであつた。パッチェンは素朴な快樂主義的觀念聯合心理學を基礎として、軍事國家から自由契約への進化の代りに、「苦痛經濟」から「快樂經濟」への社會的進化過程を構想したのである。アーサー・ハドレーの『經濟學』(Arthur T. Hadley, *Economics; An Account of the Relations between Private Property and Public Welfare*, 1896)も、ハドレーの『原理』を基礎とし、これにスペンサーの自然淘汰論や觀念聯合心理學を加味することによつて保守的な經濟理論を主張したものであつた。ハドレーはいう。「財産権は益々生産的となる傾向がある。何となれば、われわれの産業機構は、若しも人がその資本を社會の必要とするものに使用しなければ彼等はその金を失ひ、次の期間の生産の支配から排除されるような機構であるからである。」

「中世紀の經濟學者にとつては實業家は公認された盜賊と考へられていたが、現代の經濟學者にとつては、それは公衆の恩人である。……われわれは實業家と社會全體との利害の本質的一致を確信するが故に、われわれは資本家に対し、社會の生産的資源を使用する最も完全な自由を與えるものである。」と。

しかしながら、一方においては舊き觀念聯合心理學に對する批判が有力に擡頭しつゝあつた。例へばジョン・デューイは有名な『心理學における反射弧の概念』(John Dewey, *The Reflex Arc Concept in Psychology*, 1896) において行動主義の立場から從來の心理學に對する批判を行つた。「研究はつねに、生理的昂奮に依存する心理的狀態の代りに、注意がどこに向けられるかを豫め決定し、また心理的狀態に對して、それを認定するのに用いられる内容そのものを與えるところの行動を示す。……われわれが視覚し、感觸し、味覺し、嗅覺するものは、われわれの行動に依存するのであつて、その逆ではない。」というのがデューイの根本思想であつたのである。

シカゴ大學のカルドウェルの講議もやはり行動主義の立場に立つものであつた。彼はいう。「哲學は第十八世紀の原子論的、機械的、生理學的自然主義に對してではなく、第十九世紀の有機的、進化論的、生物學的、心理學的自然主義に對決する義務をもつ。」「それゆえに行動こそは哲學のための『最高事實』である。何となれば、行動——人間の、知性的若しくは動機的行動——は、それ自身のうちに、單に心理學的、有機的運動ばかりでなく、感情と知識とを含んでいるからである。」「哲學の發展は『われ思惟す、故にわれ存在す』という傳統的命題から出發するとともに、『われ行動す、故にわれ存在す』という命題から出發すべきである。」と。

デューイとともに仕事をしていたヘンリー・スタチュアート(Henry Waldgrave Stuart)は經濟學の分野における快樂主義的哲學を分析し批判した。彼はヴェブレンのすゝめによつて『政治經濟學雜誌』にかいた論文『主觀的價値の快樂主義的解釋』において、ハドレイやパッテンの立場を次のように批判したのである。「主觀的價値判斷とは、ペンタム及びその門下ジェヴォンスによつて極めて精密に規定せられ、後に經濟學においてウェーバー法則の型によ

つて定式化された方法によるところの、快樂と苦痛を計量する過程である。……（しかし）快樂はそれ自身としては意識の第一次的事實ではない。……快樂とは、特定の行動の状態若しくは様相と共存する感情である。……快樂は、他の言葉をもつてすれば、ある種の既存の行動目的の到達の結果である。それは、それ自身が目的ではない。人間はつねに『現實的客觀的行動』を追求する。」と。スチュアートは、これ等の論文の成立のいきさつについて「執筆をする場合に私はつねに（ヴェブレンの）絶えざる激勵をうけ、また大體において彼の承認をえたとと思う。私ははつきりと思ひ出す。『正常性』の問題に對する若干の見解については、私は彼から聞いたことの指導に従つたということ。若しも彼の忍耐と激勵とがなかつたならば、これ等の論文は全くかゝれなかつたであらう。」と言つてゐるが、そのことは、ヴェブレンとスチュアートとの間に緊密な學問的接觸があつたことを物語るものである。

このように保守と革新との二つの思想傾向が互に對立し相剋する當時のアメリカ學界において、ヴェブレンはもちろん進歩と革新の側に立つてゐた。しかし、それにもかゝらず、ヴェブレンの身邊の事情は多少とも好轉した。かのベミス事件が最高潮に達して一八九五年十一月の頃、ヴェブレンはその教え子の一人であるミス・ハーデー——彼女は當時ウェルスリーの學校に勤めていた——に宛てた手紙の中でこう書いている。<sup>(1)</sup>

「來年私の再任命の機會がどうなるかはまだ判りません。私がベミスの先例によつて豫算から削られることもありえないことではありません。それは來月きまるのです。ことを圓滑に運ぶために私は俸給の引上を希望しました。尤も私は、私が現在やつてゐる仕事はいまの俸給以上の價值はないということを度々聞かされてゐるのですが。」

しかし、ヴェブレンは除籍されなかつたばかりか、間もなく「インストラクター」に昇進し、更にクロッソンが辭

職した後は「理論」科目を擔當することゝなつた。ヴェブレンは三十九歳になつた。その頃彼は『有閑階級論』の執筆と出版の準備に着手したのであるが、その間の消息については、やはりハーディーに宛てた手紙の中に次のように述べられている。

「われわれがこの秋に再び校庭を歩き廻つたときに、私はもう一度あることを、いつか書いてみたいという想いに驅られました。また私は自分の言いたいことが益々はつきり判つたようにも思います。しかし私はもう一年間はそれについて何事もしないでしよう。私はゆつくりしている時間が少しもありません。たとえそれをやるにしても、それに取りかゝるのはずつと先になるでしょう。計畫の最初の巻は『有閑階級の理論』です。私は今月多少それに手をつけました。私は毎日一、二時間をそれに當てています。それをやるためには講義を怠けねばなりません。私は序章の一部分をかきました。それは多分十二、三頁になるでしょう。」

ヴェブレンは十二月にもミス・ハーディーにこう書いた。

『有閑階級論』は、ジャーナル十二月號が進行中はむろんしまい込まれていましたが、いまはまた机の上に載つています。：私はいまこゝに座つて、この極めて理論的な織物の實體を紡ぎ出そうとしています。執筆がすゝむにつれて、いやむしろそれをすませようと試みるときに、私は目先きの主要問題と多少とも關係のある未知の經濟理論の過度の發明によつて惱まされます。ですから恐らく五、六十頁になるものを書いた後でも私はまだ術示的消費の理論を見つけていません。それは勿論、この著作の實質的な核心となるものです。」

翌一八九六年二月にもヴェブレンは書いている。「過去三週間『有閑階級論』は停頓してしまい、約半ダースの枚數の原稿を紙屑籠に奉つた外は何にもしませんでした」と。その同じ手紙の中でヴェブレンは人類學的著作を読む

ことをすゝめて次のように書いているが、それは當時におけるヴェブレンの研究態度を示す一つの資料となりうるであらう。

「私が貴女にすゝめた人類學の讀書は直接に役立つかどうかは判りませんが、しかし人類を知るといふ意味においては何等かの役に立つでしょう。人類學者のみる人間が、日常生活や經濟生活の中でわれわれがみる人間よりもより一層人間的存在といふわけではありません。それはもつと人間味が少いでしょう。しかし、人類學的觀察は普通、古典派經濟學者によつて行われているものよりも、展望的なまたより發生論的な人間觀を與えるでしょうし、また『經濟人』の觀念に對して、より多くの幅と眞實性を與えるものであります。」

一八九六年の夏にはヴェブレンはウィリアム・モリス (William Morris) に會うためにヨーロッパに旅行した。しかし、そこでヴェブレンが見出したものは、もはや指導的社會主義者としてのモリスではなくて、一人の工藝家としてのモリスであつた。その頃ロンドンでは國際社會主義會議が開かれ、フェビヤンスは革命的社會主義の代りに、「進化的」社會主義の政策を樹立していた。アメリカでも同じような變化が起つた。一八九六年以前においてはアメリカの社會主義運動は外來的なものであつて、主としてドイツ社會主義の刻印をもつていたが、それ以後においては、より穩健なアメリカ的社會改良主義が發展し始めたのである。

(1) Joseph Dorfman, *ibid.*, p. 132—133.

#### 四

ソースタイン・ヴェブレンとシカゴ大學

シカゴ大學は一八九六年七月、その創立五周年を祝つた。設立者ジョン・ロックフェラーはそのとき初めて大學を訪問したが、學生はそれを歓迎して

John D. Rockefeller

Wonderful man is he,

Gives all his spare change

To the U. of C.

He keeps the ball a-rolling

In our great varsity.

と歌い、その代表は「感謝は、われわれが彼に對して抱くより深き、より生き生きとした感情にとつてはあまりに狭き言葉である。彼の仕事は日々われわれの全内面的意味と性格を、改造し深化し研磨しつゝある。」と演説した。

また、主席デイン、ジャドスン教授も教授會を代表して「近代經濟界を特徴づけている同じ廣き見識は、教育施設にとつても不可欠のものである。われわれは、われわれの創立者を、この根本思想、すなわちシカゴ大學の基調となつてゐる思想を明確に把握する慧知の持主として歓迎する」と述べたし、ハーバー總長もロックフェラーを始め、ヤークス、マーシャル・フィールド等の寄附者に對して公式の謝意を表明した。

その年の夏には大統領候補指名大會が開かれた。共和黨はウィリアム・マッキンレイ (William McKinley) を指名した。シカゴに開かれた民主黨大會においては、最初はアルトゲルト (Altgeld)——イリノイ州知事であつた進歩的

政治家——が有力であつたが、彼は外國生れであつたために結局ブライヤン (Bryan) が指名された。選舉戦はシカゴにおいて特に熾烈に戦われた。農民や労働者はブライヤンを支持したけれども、銀行業者、保険業者、鐵道業者等はすべてマッキンレイに應援した。選舉の結果は結局共和黨の勝利に終り、イリノイ州知事もアルトゲルトに代つてタナー (Tanner) が當選した。

しかし、經濟界の情勢は必ずしも好轉せず、依然として一般的不滿が残つていた。一八九七年六月には、アメリカ鐵道労働組合はデブスの指導の下に「アメリカ社會民主主義」に改組された。シカゴにおいては協同組合大會が開かれ、オランダ・デルフトの國際協同組合第三次大會へのアメリカ代表としてヘンリー・ロイドが選出された。ベラミー (E. Bellamy) の『平等論』(“Equality”) が出版されたのもその年のことであつた。

舊き心理學や生理學に對して新しい學問をおき換えようとする運動はなお續いていた。シカゴ大學では一八九六年にロイド・モルガン (C. Lloyd Morgan) が「習慣と慣習・遺傳の研究」を講じ、一種の本能心理學を提唱した。彼の意見によれば「人間は他の動物よりも、一定の本能的行動のより少い部分を遺傳する。その代りに彼は獲得と適應の内部的力を遺傳する。それが彼をして、極めて複雑であり特殊の性質をもつ環境に適應せしめるのである」と考えられた。カルドウェルは、パッテンの『社會原力の理論』をもつてスペンサー的なものとしてこれを批判した。彼によれば「われわれの環境は、外部的自然若しくは無意識的物理的必然性によつて突然われわれに對して作られたものであるのではない。それは本質的には、われわれが作ることができ、少くとも修正したり理想化したりすることができようであるものである」と考えられた。カルドウェルはまた一八九七年、アメリカ心理學會において、「心意は感

覺と感情以外の何ものでもない」という舊き心理學理論を批判するとともに、一八九八年四月の『國際倫理學雜誌』においては、「哲學と行動經驗」という論文をかねて本能・行動心理學を主張した。

このような社會的、學問的環境の下に、一八九六―七年の間、ヴェブレンがいかにその研究をすゝめ、その思想を發展せしめたかは、その間に彼が『政治經濟學雜誌』に執筆した多くの書評によつて窺うことができる。

一八九六年十二月號にはエンリコ・フェリ(Enrico Ferri)の『社會主義と實證科學・ダーウィン、スペンサー及びマルクス』の書評をかねている。フェリはこの書物において、マルクス主義はダーウィニズムとは兩立しないということを主張しているのであるが、元來ダーウィニズムを高く尊重していたヴェブレンは、この書物によつて少からず影響を受けたように思われる。一八九七年三月號にはリヒャルト・カルワー(Richard Calver)の『社會主義入門』の書評をやつてゐるが、この場合においては、ヴェブレンは單なる産業機構の必然的變化を通じての社會主義の不可避性に關して多少見解を改めた跡が窺われる。六月號にはアントニオ・ラブリオラ(Antonio Labriola)の『唯物史觀論』とウェルナー・ゾンバルト(Werner Sombart)の『第十九世紀における社會主義と社會運動』との二つの書評を載せてゐる。ラブリオラはマルクス主義における労働價值論や階級闘争論よりもむしろ唯物史觀を重視するのであるが、ヴェブレンは、唯物史觀は社會的進化の觀念以上に出るものではないと主張するのであつて、この點においても彼の思想の新しい變化がみられる。また十二月號のマックス・ローレンス(Max Lorenz)『マルクス主義的社會民主主義』の書評においては、ヴェブレンは「唯物論は人間をもつて、過程において單に社會的法則や變動の傳導乃至發現の媒介物として役立つところの社會的存在としてのみ考へる。これに反して人間は事實においては、彼

自身の生活から行動する個人である。」と主張する。これは新しい心理學や生物學を基礎とし、行動概念を基準としてマルクス主義の根本理論を批判したものであつて、そこにもヴェブレンにおける一つの思想的變化がある。その外、この時期においてはヴェブレンは、ブレンジ(N. Ch. Bunge)、シモラー(Gustav Schmoller)、ウィリアム・マロック(William H. Mallouk)等の諸學者の著書について書評を試みているが、それによつてわれわれは當時のヴェブレンが社會主義思想、人類學、歴史學、社會學、經濟學等きわめて廣汎な分野に互つて不斷の讀書と思索を重ねつたことを知りうるのである。

一八九八年には米西戰爭が起り、アメリカの資本主義體制は新しい發展段階に到達した。新しい資本集中が起つた。スタンダード石油會社は持株會社の形態をとり、ニュージャーシー・スタンダード石油會社を創立した。シカゴ大學は新たに軍事科學、植民地經濟學等の講座を開いた。

經濟學の領域においては、ジョン・ベイツ・クラーク(John Bates Clark)が『富の分配』を著わした。それは周知のようにリカード、ミル、ジェヴォンス、マーシャル等に匹敵する限界主義經濟學の代表的著作であつて、クラークはその序文において「社會の所得の分配は自然法則によつて支配されることを示すことが本書の目的である」と言つた。同じ年に出版されたバツテンの『イギリス思想の發展』も、快樂と苦痛の計量という「心理的特性」によつて社會進化の過程を究明しようとしたものであつた。

哲學、心理學の分野においては、新しい理論と思想を模索するいろいろな試みが行われていた。カルドウェルは一八九八年、アメリカ心理學會において、「人間の成長の初期段階における心理學的發展を、その社會的性質並に社會組

織との關連において究明する」ところのポールドウィン (J. Mark Baldwin) の「發生論的方法」を支持した。またウィリアム・ジェイムズ (William James) は『哲學的概念と實踐的結果』という公開講演——それは同じ年に出版された——を行い、センセーションをひき起した。それはほぼパースの『科學の論理』を基礎とするところのプラグマティズム哲學の宣言であつたのである。その外、一八九八年にはロイドの『動的理想主義』、デューイの『進化と論理學』等が出版されたが、それ等はいづれも哲學の領域における新しい思想を探索しようとする努力の表現であつた。

一八九九年にはデブスを中心として社會民主黨がシカゴにおいて結成された。同黨はイギリスや大陸の社會民主黨に倣い、「進化的社會主義」を主張した。後の制度派經濟學者ジョン・コモンズ (John R. Commons) がシラキューズ大學を「非自發的」に去つたのもこの年のことであつた。

ヴェブレンは、その飽くことを知らぬ旺盛な知識慾をもつて、これ等の新しい思想界の發展をすべて自らのうちに吸収しつゝ、自己の思想的立場を建設して行つた。一八九八年から一九〇〇年までの期間は、ヴェブレンの學問的生涯の中で特に稔りの多かつた時期であるように思われる。彼は一八九八年七月から一九〇〇年一月までの間に、經濟學方法論に關する一連の論文——それ等は後に『近代文明における科學の地位』(一九一九年)に收められた——を『政治經濟學雜誌』に發表した。『經濟學は何故に進化論的科學でないか』(一八九八年七月號)、『經濟學の豫備概念』(一八九九年一月、七月及び一九〇〇年一月號)等がそれである。

これ等の論文においてヴェブレンは、従來の經濟學——古典學派、歴史學派、マルクス經濟學——に對し、彼獨特の批判を加えるとともに、後に『營利的企業論』(一九〇四年)や『工匠本能論』(一九一四年)において積極的に展開

したところの彼自らの經濟學、すなわち「進化論的」經濟學の方法を提示しようと試みた。中でもヴェブレンの批判の鋒先は、フィジオクラット、スミス、ケヤンズ、ジョン・ベイツ・クラーク等の古典派理論に向けられた。ヴェブレンの見解によれば、古典學派の理論的特徴は、心靈崇拜的、快樂主義的、功利主義的な點にあるが、このような理論は結局において靜態的分類學以外の何ものでもなく、人間の經濟生活の質的累積的變化を把握するには不十分であつて、眞の科學としての經濟學は、快樂主義的心理學とは別個の、本能心理學若しくは行動心理學の基礎の上に、進化論的、ダーウイン以後的科學として構築されねばならない、というのである。

一八九八年にはヴェブレンはまたシカゴ大學の卒業生のクラブにおいて一連の講演を行つたが、その内容は「工匠本能と勞働の嫌惡」、「所有制の起源」、「野蠻時代における婦人の地位」等の論文として同年九月から翌年一月に互る期間の『アメリカ社會學雜誌』に連載された。それ等の論文は、社會學、人類學、民族學、歴史學等の諸分野に互るヴェブレンの該博な研究の成果であり、またその年に出版された『有階級論』の主要内容に當るものであつた。

## 五

ヴェブレンはいまや四十二歳となつていた。一八九九年には彼はシカゴ大學において「文明における經濟的要因」と題する講議を始めた。彼はすでに三年間、インストラクターとして大學に勤務していたので、數百ドルの慣行的な昇給を要求したが、ハーパー總長は彼の勤務状態は十分に評價するけれども、彼が他の大學に轉ずることは敢て反對しないという態度を示した。そこでヴェブレンは辭表をかいた。しかし、このときにもラフリンの斡旋によつて昇

給が實現し、ヴェブレンは大學にとどまることができた。

その年の二月には豫てから豫告されていたヴェブレンの處女作『有閑階級論』(T. Veblen, *The Theory of Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions*, 1899) が世に送られた。この書物はヴェブレンの永き研究と思索の成果であり、そこに含まれた思想はシカゴに來るずつと前から彼の胸裡に抱かれていたものであるが、彼はその最後の章をシカゴ大學の同僚スタールから借りていた一室においてかいた。スタールはかいてゐる。「ヴェブレンはそれをもつて私の部屋へやつてきて、一章毎に大聲に讀み上げるのを常とした」と。この書物は「文學的立場からみれば疑いもなく英文學の博士論文の價値があつた」(ドーフマン) が、出版業者はその商品的可能性について疑いをもつたので、ヴェブレンは彼等に保證金を提供しなければならなかつた。

この書物の目的とするところは「近代生活の經濟的要因としての有閑階級の地位と價値」を論ずることにあつた。詳言すれば、それは有閑階級、すなわち非産業的有産階級の直接の職能と、獲得や蓄積の從屬的職能に關聯する彼等の活動やその歴史的意義を究明しようとしたものであつた。そのために彼は、私有財産制度や有閑階級等の社會制度の歴史的發展過程とそれに隨伴する習慣や傳統の變化を、行動心理學を基礎として明かにすることを企てた。ヴェブレンの見解によれば、有閑階級制度は主として野蠻時代の掠奪的段階において發生するものであるが、しかしその存在はすでに古き未開社會においても、男性と女性の地位の區別の中に豫告されていた。この時の女性の仕事は工匠本能と産業(勤勞)の端緒を象徴するが、これに對して男性は、「搾取」の行爲によつて非産業的職業の出現を象徴してゐる。しかし、未だ所有制の發展がない平和な未開時代においては、人々はなおその集團生活を促進するために彼等

が行う奉仕によつて他のものから區別されるのであり、従つてそれ等集團成員の間の競争はなお主として産業的（勤勞的）競争であつた。ところが野蠻時代の掠奪文化の時代においては、産業的な奉仕と服従は不名譽の表徴となり、その代りに「成功的な攻撃行動」の上に月桂冠が與えられる。このような經濟社會における所有と蓄積の近代的形態が、貨殖的職業であり有閑階級である。かくしてヴェブレンによれば、近代社會の有閑階級は賤しき勞働の煩勞から解放され、衒示的消費（conspicuous consumption）や顯著な富財蓄積によつて自己の榮譽ある差別的地位をつくり出そうと努めるようになる、と考えられるのである。

ヴェブレンのこの書物は、その獨特な文體、該博な知識、警拔な批判によつて當時のアメリカ思想界の注目を集め、いろいろな論議をまき起した。ダートマスのウエルズ（D. Collin Wells）とか、かつてのヴェブレンの同僚カミングス（John Cummings）等は、これについて反感的な書評を行つた。これ等の人々は「彼等の屋敷内の神々がこの偶像破壊者によつて攻撃された」（ウォード）ことに反感をいだいたのである。しかし、ロッシ（Edward A. Ross）、ウォード（Lester F. Ward）、ンウ・ヘルネス（William Dean Howells）等は、いずれもこの書物の學問的價值を高く評價した。殊にウォードは、『アメリカ社會學雜誌』一九〇〇年五月號に載せた書評において「この書物は簡潔な表現、鋭い反措定、警拔な、しかも愉快な章句に満ちている。そのあるものは皮肉や諷刺と解釋された。しかし、……この書物は批評家自身の仕事である」とかいた。このようにしてヴェブレンは、この書物の出版によつていわば一夜のうち一流學者の仲間に入つた。彼の用いた conspicuous consumption, conspicuous waste, vicarious leisure. 等の言葉は忽ち一般に普及した。そしてヴェブレンは一九〇〇年には助教教授に昇進せしめられたのである。

## 六

第二十世紀初頭のアメリカにおいては、シャーマン反トラスト法の存在にもかかわらず、資本の集積と集中は益々顯著に進行した。一九〇一年にはカーネギーとモルガンとの提携によつて一〇億ドル巨大産業ユー・エス・スチール會社が組織された。

このような産業獨占に對して一方においては批判と反對がつゞいていた。例えばゲント (W. J. Ghent) は一九〇一年に "Our Benevolent Feudalism" を著わして獨占を攻撃した。彼の見解によると、大トラストによる富の集積は、勞働者を工地から追い拂うことによつて、「封建的國家」若しくは「産業のモルガン化」をもたらす、國家は産業貴族を先頭とし、富の順序に並ぶ階級の階層關係をつくり出すといふのである。一九〇二年には多くの雜誌が金融資本と政治との關係に関するセンセシヨナルな記事を掲げるようになり、ターベル (Ida Tarbell)、ロウソン (Thomas Lawson)、ステフヘンス (Lincoln Steffens)、ベイカー (Ray S. Baker) 等の文筆家も好んでこの問題を筆に上せた。しかし、アメリカ經濟學界の一般の傾向としては、むしろ資本集中の不可避性を認めようとする意見の方が有力となつた。例えばイリーは『獨占とトラスト』(一九〇〇年)において、トラスト禁止の事實上困難であることを認め、トラストを禁止する代りに重要産業を國有化せしめようとする意見を述べたし、ジョン・ベイツ・クラークは『獨立』誌上においてゲントの見解を反駁し、いわゆる資本主義體制が現在までつゞき、將來もつゞくことを許されていることは、それが「封建的」な性質をもつていないことの證明であると主張した。

ヴェブレンの學問的興味も、そのような環境の影響の下に、獨占と景氣變動の問題に集中されていたように思われる。ヴェブレンはその頃、新しい著作を準備しつゝあつたが、その題目は——彼がウェズレイ・ミッチェルに告げたところによると——“The Captain of Industry: A Romans.”となる筈であつた。また彼は、ミラーが一九〇二年カリフォルニア大學に轉出した後をうけてトラスト論を講ずるようになったが、その題目は「國家と産業組織の關係」というものであつた。更にヴェブレンは一九〇〇年から一九〇四年の間にも、主としてシカゴ大學の機關誌のために多數の論文や書評を執筆しているが、その中には、バシル・バウロフ (Basil A. Bauroff) の『恐慌の切迫・合衆國における富の集積から結果する状態』の書評(一九〇〇年十二月號)、論文『産業的職業と金錢的職業』(一九〇一年)、論文『藝術と技術』(一九〇二年)、論文『近代經濟界における貸付信用の使用』(一九〇三年)、バートン (T. E. Burton) の『金融恐慌と商工不況期』の書評(同年)、チルスキー (S. Tschierschky) の『カルテルとトラスト』の書評(同年)、論文『トラストの初期の實驗』(一九〇四年)等が含まれている。

ヴェブレンは一九〇三年六月二十七日、グレゴリー夫人(かつてのミス・ハーディー)に宛てて、「このパンフレット(『近代經濟界における貸付信用の使用』)は近刊豫定の書物の一章であります。その書物は今週、出版社をさがしにゆきました。……その名は『營利的企業論』です。」とかいてゐる。翌年にはヴェブレンのトラスト論の講義題目は「營利的企業の組織」と變えられた。そしてその年に、彼の第二の著作『營利的企業論』(T. Veblen, The Theory of Business Enterprise, 1904)が出版されたのである。

前著『有閑階級論』においては、私有制と有閑階級の制度的發展過程の究明が問題であつたが、この新しい書物に

ソースタイン・ヴェブレンとシカゴ大學

においてはヴェブレンは、近代經濟社會そのもの、構造と運動、有閑階級がその中において營む役割を分析することを企てる。彼によれば、近代文明は「産業」と「企業」との二つの敵對的要素から成り立つてゐる。産業は眞の人間の必要に仕えるものであるが、企業は貨幣的自己向上のための實業家の考案である。人間活動の創造的分野においては、機械が支配的地位に立ち、それが人間の努力と近代技術との緊密な統一を要求する。そこでは能率が、當然に産業の動機とならねばならない。ところが企業の支配下においては、産業行程の操作はすべて、利潤投資の原理によつて動く企業の掌中にある。そこでは産業は工匠本能や奉仕性の原理によつて運営されるのではなく、全く貨幣的利益の原理によつて導かれる。このような過程は「貸付信用」の利用によつて益々促進される。近代的信用制度は、營利的企業の豫想収益力の過大資本化に導くものであるが、産業はこのような金融的操作によつて益々少數の貨幣的冒險者の手中に集中される。株式市場操作、株式資本の再編成、少數の産業將帥の手による過大資本化——それ等のものが、有力な生産的勞働者を下に從屬せしめる貨幣的封建體制をつくり出す。しかもこのような價格體制の下においては好況と不況の循環が不可避的である。「恐慌、不況、沈滞、投機的昂揚、『繁榮期』等は企業の第一次的現象である。」「經濟界における眞正若しくは正常的な恐慌、不況及び好況は、凶作のような偶然の結果ではない。それは經濟界の正規の過程の中に現われるものである。」——ヴェブレンはこのように論じたのである。

この書物に對する學界の評価はまちまちであつた。社會主義者ウォーリング(W. E. Walling)は『國家社會主義評論』において、この書物の價值を高く評價し「凡ゆる都市のちで最もアメリカ的な都市の教授であり、ロックフェラーの創立した大學の祿をはむヴェブレンは、宣傳家ではなくて、その素材を科學的なやり方でとり扱つてゐる。

彼はアメリカ社會主義運動に對し哲學的脊柱を與える」とかいたが、かつての同僚ワーゲランド (Agnes Wergel-and) は『政治經濟學雜誌』の書評において、「人々は彼が露骨で、屢々不愉快な眞理以外のものには同情をもたず、宣傳を行わないことを不快に思うであらう」と言つたし、プリンストンの經濟學教授ダニエルス (Winthrop Daniels) は、『アトランティック・マンスリー』において「しかし、明かに人間性の悲惨な状態を嘲笑している著者は、何等の匡正策をも提示しない。そして彼は産業の正常的かつ健全な様相に盲目である」と批評した。

ヴェブレンに對するこのような批評は當時の經濟學界の保守的な傾向からみればむしろ當然であつた。ヴェブレンはその性格が狷介であつた上に、そのアメリカ近代社會への批判はあまりにも鋭く、かついわば「外來的」であつたのである。

ヴェブレンは一九〇四年、『營利的企業論』を出版した後、ヨーロッパ旅行を試みたが、その期間に生まれた私行上の風聞は、彼のシカゴ大學における立場を一層悪くした。そして彼は一九〇六年、シカゴ大學を去つた。しかし、ヴェブレンの學問と思想をあのようにな發展せしめたのは、外でもなく、新興都市シカゴ大學における活潑な學問的空氣と、ハーパー總長、ラフリン教授等の大學當局の理解であつたように思われる。(一九五〇・二・一五)